



「韓流」と書いて「かんりゅう」ではなく「はんりゅう」。実はこの呼称、韓国観光公社の「韓流マーケティング委員会」がブームに先んじて統一した結果だった。著者を含めた同委員会メンバーは記事を書くとき、必ず「はんりゅう」とルビを振るようにしたのだという。

日本で最も多く韓流スターと会い、産経新聞発行のフリーペーパー「えーびず」の「最新韓タメ情報」でも健筆を振るった韓国エンタメナビゲーターの著者が、韓流に恋した10年間を振り返るエッセー集。

「冬ソナ」の大フィーバーからはや5年余り。ペ・ヨンジュン様やイ・ビョンホン様追っかけ組はもちろん、「韓流四天王」が誰だったか忘れた、ちょっとだけハマリ組にも本書は必読。

▷1575円、朝日新聞出版

患者さんには絶対言えない
大学病院の掟



中原英臣・著

大学病院で起こった医療事故と医療裁判を描いた小説『白い巨塔』を山崎豊子が書いたのは40年以上前になる。数年前にテレビドラマ化された作品を見た著者は、日本の医療が40年も前と比べて少しも変わっていないことに愕然としたという。

妊婦のたらい回し、産科医や小児科医、地方での医師不足や看護師不足、信じられないような医療事故や医療ミスが多発……と山積する課題。大学病院がすべてを仕切ってきた日本の医療は「破綻寸前」と言い切る。

日本の医療の頂点に君臨する大学病院の「常識」は世間の「非常識」。本書は、健康な人まで「病人」にしてしまう診療基準のカラクリなど、世間の常識がまったく通じない大学病院の実態を、徹底的にあぶり出していく。

▷788円、青春出版社

ダンディズムの系譜

ダンディズムの系譜
男が憧れた男たち



中野香織・著

「ダンディー」とひとことで言っても、いったい何をもってダンディーとするのか。そんな疑問を爽快に解いてくれる。

服飾関係の著書を多く手がける気鋭のファッションジャーナリストが独自の視点でダンディズムを紹介する。

「ナポレオン（英雄）になるより、ブランメル（ダンディーの祖）になりたい」と理想を述べたのは詩人バイロン。

地位も財産もないのにヨーロッパ社交界の話題の中心にいたブランメルの「離れ業」が面白く、オスカー・ワイルドやジョーン・コネリーといったダンディーの代表選手たちの秘伝も多数。

オバマ米大統領のミスター・ダンディーぶりもそのスーツスタイルに着眼すると、また新たな姿が見えてくる。

▷1260円、新潮社

独自の視点で代表選手を解説

10年間を振り返るエッセー集